

## 音楽資料からみた NACSIS-CAT における統一書名典拠

大阪教育大学附属図書館図書係  
中谷 実邦子

### 目次

- 0 . はじめに
- 1 . NACSIS-CAT の書誌レコードの中で、何が音楽資料か？
- 2 . 音楽資料の特性について
- 3 . NACSIS-CAT における典拠ファイルとリンク形成
- 4 . 統一書名典拠
  - 4 . 1 . 統一書名典拠の矛盾
  - 4 . 2 . 具体例
  - 4 . 3 . 内容著作との関係
- 5 . 統一書名典拠の未来 - 提案事項 -
- 6 . おわりに

### 0 . はじめに

日々、NACSIS-CAT に目録を登録している。この世の中には、いろいろな形の資料がある。それは「普通の」本であったり、雑誌であったり、CD-ROM であったり、登録すべき資料は、それぞれいろいろな媒体を持っている。毎日接していても、壁を感じないで扱える資料と、目の前にすると、身構えてしまうような資料とに分かれてしまう。それは自分の知識や経験の有無といったことにも関係するのだが、個人的にいえば、なかでもとりわけ音楽資料<sup>1</sup>なのである。

そこで、なぜそうなのかということを考えてみた。楽譜の場合、資料種別コードで楽譜の種類をあらわすのであるが、その楽譜の種類がよくわからない。タイトルの取り方に細かな取り決めがあるらしい。資料の数量の書き方に図書とは違う決まりがある。注記に書くべき事項がたくさんある。内容著作も図書よりもたくさん書かなくてはならない場合が多い。統一書名典拠も作らなくてはいけないらしい。が、それはなかなか手間だ。また、統一書名典拠も含めて、典拠フィールドの繰り返しが非常に多くて面倒だ。

こういったことの中には、前任の担当者より知り得たこともあるし、経験的に知ったこともある。しかし、いまだに書誌調整がたくさんくることから考えても、音楽資料の書誌作成はまだ奥深いものがあるらしい。

そもそも、どうしてこんな詳細な取り決めが必要なのだろうか？また、著者名典拠には

馴染みがあったけれど、統一書名典拠とはいったい何なのだろうか？

このレポートでは、自分にとってはまだまだ謎に満ちた音楽資料を統一書名典拠という観点から考えてみたい。

## 1．NACSIS-CAT の書誌レコードの中で、何が音楽資料か？

音楽資料とそれ以外の資料とに分ける基準となるのは、一般資料種別(GMD)コードである。楽譜であれば、GMD が c (印刷された楽譜) または f (手稿の楽譜)、録音資料(音楽)であれば、s というコードが与えられる<sup>2</sup>。つまり、現在の GMD コードで区別することができる音楽資料は、楽譜と録音資料の2種類ということになる。実際は、映像資料の中にも、音楽が含まれている。ところが、映像資料の中から音楽資料だけを区別できるようなコードがないため、機械的に識別することはできない。したがって、このレポートのなかで述べる数値的なデータに関しては、特にことわりがない限り、映像資料は含まれていない<sup>3</sup>。

1999年10月29日現在で、NACSIS-CATには44,496件の音楽資料の書誌が登録されている。その内訳は、楽譜(印刷されたもの)が36,103件、楽譜(手稿)が21件、録音資料(音楽)が8,372件である。ほぼ同じ10月22日時点においてNACSIS-CATに登録されている全図書書誌レコード数は4,352,009件<sup>4</sup>であるから、音楽資料はその1%程度を占めている。また、その書誌の約85%までが音楽や芸術系の大学図書館によって作成されており、音楽資料を登録しているところと、そうではないところの差は歴然としている。教育系の大学でも音楽資料はかなり受け入れられていると思われるが、その書誌作成数は全体の4%程度を占めるにすぎず、前者の圧倒的な数の前には見る影もない<sup>5</sup>。

## 2．音楽資料の特性について

音楽資料とひとくちにいてもその媒体はさまざまである。一般的に図書と呼ばれるもの多くが、紙に文字や図版を印刷するという手段を使っているのに対して、音楽資料は文字で表されることは、ほぼないといっていいだろう。代表的なものとしては、楽譜(これにもミニチュアスコア、パート譜などさまざまな形態がある)、CDなどの録音資料、ビデオカセットなどの映像資料があげられる。そのそれぞれが伝達しようとする中身は、音楽という共通点はあるものの、それぞれ異なる性質のものである。一般的な図書資料とどういった点で異なるのかを確認するために、松浦淳子と松下鈞がおこなった分析にのっとり、音楽資料の持っている特徴をここで整理してみよう<sup>6</sup>。

### 1) 一媒体多書誌

ここでいう書誌とは、楽曲<sup>7</sup>のことである。ひとつの資料に複数の楽曲が含まれていることが多い。利用者は一般的に、楽曲単位で資料を探そうとする。このようなことは一般の図書においてもよく起こりうることである。楽曲の場合は、一楽曲が独立して求められる場合が多いにもかかわらず、独立してひとつの媒体(資料)に収められるということが、物理的に不向きである傾向が高いということがいえるだろう。

### 2) 一書誌多媒体

ひとつの楽曲は、様々な媒体で出版される。すなわち、楽譜やCD、ビデオ、LDなどが

あげられる。

### 3) 断片化と可塑性

ある楽曲は、楽曲全体としてひとつの資料となることもあるが、序曲だけ、アリアだけなど、作品の一部が断片化され、独立した資料となることも多い。また、ある楽曲の全体またはその一部を他の楽器で演奏するために編曲されたり、別の作品に改編されたものが、別の独立した出版物として存在する。このようなときは、別の資料として取り扱われなければならない。さらに、このように独立して収められている楽曲と、オリジナル作品全体との関連付けも、音楽作品の資料に特有の問題で、関連付けがわかるような目録を作成する必要がある。

### 4) 再現芸術としての時空的限定性と嗜好性

同じ楽曲を異なる演奏者が演奏した場合、それは別物となる。また同じ楽曲を一人の演奏者が演奏したとしても、それは演奏された時間や空間が異なるので、別の作品ということになる。利用者はそれを識別して資料を求める傾向がある。

### 5) 国際性と多言語性

ひとつの楽曲が世界中の出版者から、様々な言語表記で出版される。このとき、タイトルが言語によって違っていたり、作曲者名のスペリングにゆれがあったり、ということがよく起こる。これらのことから、音楽資料の目録作成においては、異なる言語表記の人名、作品名、出版物を、統一標題、典拠コントロールなどによってその同一性と相違性を管理することが必要になってくる。

以上のような特性をふまえた上で、音楽資料の目録作成をしてゆく必要性がある。つまり、同じ曲が収められているという条件のもとで目録を作成したときに、利用者がその書誌を見て、確実に識別できるような記述を行わなければならない。さもなければ利用者が求める資料に正しくたどり着くことができないという結果を引き起こすだろう。1) から 5) のような特性が絡み合っ成り立っている資料を探すためには、統一書名典拠が有効な手段であるということがいえそうである。

## 3 . NACSIS-CAT における典拠ファイルとリンク形成

前章でみてきたように、音楽資料にとって典拠コントロールは重要な意味を持つことがわかった。そこで、この章では典拠レコードについて考えてみたい。

NACSIS-CAT において典拠ファイルは「参加組織の共有ファイルであり、書誌的記録の検索要素である標目の形を管理するためのものである」と定義されている<sup>8</sup>。また、その典拠レコードの種類は著者名典拠と統一書名典拠の 2 種類である。

目録所在情報サービスが開始されたのは 1984 年 12 月のことである。サービス開始当初は典拠レコードと書誌レコードのリンクが必須項目であった。書誌にリンクフィールドが存在する限り、リンクを形成しなければ、書誌登録できないということを意味する。そしてそれは目録作成の上で負担となったであろうことは容易に想像される。サービスが始まった当初ということで、書誌や典拠のレコード数がまだまだ少ない状況で、現在のように検索すればたいていヒットするということはなく、大半のものは新規に作成しなければならなかったであろう。そういった条件を考慮すると、強制リンクという規定はかなり厳し

いものであったに違いない。

その後典拠ファイルのリンク形成が任意化されたのは、約3年後の1987年11月のことで、現在に至っている。それには次のような理由が考えられる。第一に、典拠作成の調査に時間がかかるということ。そして第二に、典拠を作る際のツールとなるような資料がすべての図書館に備わっているわけではないということ。典拠レコードは少なくとも1つ以上の書誌にリンクしているはずである。必ずどこかの書誌にリンクしているという性格を持っているため、そのレコードはできる限り正確なものでなくてはならない。万一重複したレコードが作成されると、その修正や削除の作業には書誌レコードのそれ以上に時間がかかる。また、オンラインで全国的な共同目録を作るという試みはほとんどはじめてのものだったため、典拠コントロールをそれほどにまで厳しく行うということに理解ができない参加機関もあったことであろう。図書館によっては典拠コントロールを必要としないところがある。横山幸雄によれば「そもそも典拠コントロールは、その必要がある図書館（や書誌データ作成機関）が行えばよいのであって（中略）特に統一タイトルの場合は、通常の和図書目録作業をしている限りあまり必要性が感じられないのではないだろうか<sup>9</sup>」とある。乏しい情報から、貧弱な典拠レコードを無理やり作っても、誤りの原因となる可能性のほうがたかくなるのである。

また、次章でのべるように、統一書名典拠作成が音楽作品にも適用されたのは、1991年からであり、本格的に音楽資料の書誌がNACSIS-CATに登録され始めるのはこれ以降のことであると思われる。したがって、音楽資料の書誌は常にリンク形成任意という環境で作成されている。

#### 4. 統一書名典拠

AACR2では、「統一タイトルは、ある著作が種々の形で具象化されたもの（たとえば、版、翻訳）が異なるタイトルのもとに現れた場合に、その著作のすべての目録記入をまとめる手段を与えるものである<sup>10</sup>」と定義されている。

NACSIS-CATでは無著者名古典、聖典および音楽作品に限り、統一書名典拠が作成されている。

##### 4.1. 統一書名典拠の矛盾

NACSIS-CATのサービス開始当初は音楽作品には統一書名典拠を与えるという規則はなかったのであるが、下に引用するように、1991年、音楽作品にも統一書名典拠を作成するという方向付けがなされた。

これまでの無著者名古典、聖典の表題に加え、音楽作品名（曲集などを含む）についても統一タイトル標目を適用することになりました。これにより、様々な表題、資料形態で出版される音楽作品を、異版も含め網羅的に検索することが可能になります<sup>11</sup>。

このうちの後半部分「これにより、様々な表題、資料形態で出版される音楽作品を異版も含めて網羅的に検索することが可能になります」について、実際にそのようになっているのだろうか？このように宣言した直後に、

(1)統一書名典拠レコードの作成単位

統一書名典拠レコードは、無著者名古典、聖典の1著作(ここでいう著作には聖典の部篇も含む)に対し1レコードを作成することになっています。音楽作品についても、基本的には上記の原則に従い、1作品(作品の部分も含む)に対し1レコードを作成しますが、多くの内容作品を持つ曲集については、

(a)UTL フィールドの繰り返し可能回数等に物理的な制限がある(30回が上限)ため個々の内容作品に対してUTL フィールドを作成できない場合もある。

(b)個々の内容作品に対してUTL フィールドを作成できない場合も、集合タイトルを適用することによって、ジャンル等による限定は可能である

点を考慮し、例外的に集合タイトルを認めることにしました<sup>12</sup>。

とうように、網羅的に検索できるようになるという最初の宣言とは若干矛盾するような記述になっている。実際、集合タイトルを認めることによって、ジャンルでの検索は可能であるが、選集など、さまざまな作品が集まってひとつの資料を構成している場合、その資料の中に求める曲が含まれているのかどうかということについては、内容著作に記述があればよいが、ないときは、現物にあたって確認してみるまではわからない。

4.2.具体例

統一書名典拠レコードからそのレコードにリンクされている書誌を参照することによって検索したときと、書誌検索画面から適当な検索語を設定して検索したときとは、後者にヒット件数が多い場合が多い。ある楽曲を含んでいる資料を網羅的に検索したい、という想定のもとに実際に検索を行ってみた。ここでいくつかその実例を見てみよう。

	U:著者名典拠レコード HDNG		U:著者名典拠レコード ID	ヒット件数 <sup>13</sup>
		B:検索条件		
U		Beethoven, Ludwig van, 1770-1827 -- Symphonies, no. 5, op. 67, C minor	EA00060044	75
		Beethoven, Ludwig van, 1770-1827 -- Symphonies, no. 5, op. 67, C minor. Selections	EA00068443	1
		Beethoven, Ludwig van, 1770-1827 -- Symphonies, no. 5, op. 67, C minor; arr	EA00138527	2
B		TITLE:symphon * 5 67 AUTH:beethoven		95
U		Dvorak, Antonin, 1841-1904 -- Rusalka	EA00066867	3
B		TITLE:rusalka AUTH:dvorak		12

U	Bach, Johann Sebastian, 1685-1750 -- Herz und Mund und Tat und Leben, BWV 147. Jesus bleibt meine Freude; arr	EA00121364	10
B	TITLE:のぞみ よろこび AUTH:bach		9
	TITLE:joy man desiring AUTH:bach		21
U	Bach, Johann Sebastian, 1685-1750 -- Brandenburgische Konzerte. Nr. 5	EA0005909X	11
B	TITLE:brandenbrug * 5 AUTH:bach		32
U	Albeniz, Isaac, 1860-1909 -- Navarra	EA00045164	3
B	TITLE:navarra AUTH:albeniz		12
U	Monteverdi, Claudio, 1567-1643 -- Vespro della Beata Vergine	EA00083243	8
B	TITLE:vespro beata vergine AUTH:monteverdi		15
	TITLE:聖母マリアの * AUTH:monteverdi		7

表の見方) U : 統一書名典拠画面から検索した場合

B : 図書書誌検索画面から検索した場合

この検索例ではほとんどの場合において、図書書誌検索画面から検索した場合のほうが、ヒットする件数は高くなっている。しかし、この数字のなかには、作品の全体と部分が混在しているものもある。 の例であれば、オペラの中で歌われるアリアだけが収録されている資料も含まれているので、“Rusalka”というオペラ全体を検索したいのであるならば、あまり効果的な検索方法とはいえない。また、多言語で出版されることの多い音楽資料を検索するときに、どんな検索語を選択するか、という検索者の予備知識の有無によって検索漏れの多さが変わってくる（ のBの一番目の例）。

このような結果となる原因については次のようなことが考えられる。

書誌に統一書名典拠フィールドそのものがない、もしくはあってもリンクが形成されていない

統一書名典拠レコードとリンクされていても、それが集合の統一書名典拠であればヒットはしない

書誌に統一書名典拠フィールドがなくても、書誌中の内容著作(CW)フィールドに一曲ずつ記入されていれば、TITLE フィールドや AUTH フィールドに適切な検索語を入力すればヒットする

VT フィールドに記述があるため、TITLE フィールドや AUTH フィールドに適切な検

## 索語を入力すればヒットする

に関していえば、1999年10月の時点で、音楽資料では、統一書名典拠フィールドが記述されている書誌レコードは、26,886件、そのうちいずれかひとつにでもリンク形成されているものは21,930件である。したがって、全音楽資料における前者の割合は約60%、同じく後者の割合は約49%で、半分にも満たない。その一方で、音楽資料の書誌レコード中の統一書名典拠フィールド総数は35,527件である。したがって、1書誌あたり0.8個の統一書名典拠フィールドをもっていることになる。そのうち、リンクが形成されているものは29,433件である。したがって音楽資料の統一書名典拠リンク率は82.8%である。つまり、統一書名典拠が記述されている音楽資料は多いとはいえないが、記述されていれば、リンク形成されている確率は高いということがいえるだろう。

音楽資料にはひとつの資料のなかに10以上もの作品が含まれているものは少なくない。むしろ多いといったほうがいいたろう。その目録を作ろうとするとき、作品の数だけ統一書名典拠をつけなければいけないというのは、時間がかかりすぎるし、また、利用者としてその書誌を見た場合、長大で見づらいつわらざるを得ない。ことにWebcatの画面上では、ひとつひとつの典拠が改行されずに表示されるため、一般の利用者がこれを見やすい画面であると思うかどうかは非常に疑わしい。

### 4.3. 内容著作との関係

統一書名典拠レコードからの検索では、現状では網羅的に楽曲を検索することはできないということを確認することができた。ここでは4.2.の でふれた内容著作とのかわりを考えてみたい。

<BA32201491>の例(例1参照)では“Dominique Visse, “chansons francaises””のタイトルで、14曲が収録されている。それぞれについて、内容著作の記述がされている。それに対して、統一書名典拠は記述されていない。その一方で、著者名典拠とは、作曲者不明の一作品を除けば、すべての責任表示に関してリンクが形成されている。

統一書名典拠の本来の目的からいえば、内容著作があるから、統一書名典拠のリンク形成は不要であるという理論は成り立たないはずである。しかしながら、場合によっては、ひとつの内容著作に対して、ひとつの統一書名典拠フィールドを作成するというにもなりかねない。ひとつの書誌に同じ情報を2度書くように思われなくもない。また、内容著作に記入されているということは、書誌検索画面のTITLEなどから検索が可能であり、そのほうが利用される可能性が高いと思われる<sup>14</sup>。

結局網羅的に検索しようと思えば、タイトル、著者名などを掛け合わせる、といった検索方法と、統一書名典拠レコードからそれにリンクされている書誌を探す、といったいくつかの方法を組み合わせなければならないということになるだろう。今の状態では、統一書名典拠から網羅的に楽曲を検索するという理想は実現されていない。それはリンク形成が任意であるということが原因の一つにあげられるだろう。また、書誌に統一書名典拠フィールドを作る意義ということが、目録作成者にあまり重要視されていないのかもしれない。統一書名典拠レコードからの検索が不完全であるという意識は、ますます統一書名典拠を軽視するという結果を招く。こういった悪循環が統一書名典拠というものの存在価値

を疑問視させているのである。

## 5. 統一書名典拠の未来 - 提案事項 -

音楽資料に関する限り、統一書名典拠は NACSIS-CAT で有効に機能しているかということ、必ずしもそうではないということがわかった。今後、音楽資料の書誌を作るときには、かならず統一書名典拠を加え、なおかつリンクを形成することを求めるように方向付けることが必要なのか、それとも、今のままの不完全な状態を黙殺し、NACSIS-CAT の検索性能の高さに頼るのか。

内容著作も、著者も、統一書名典拠もすべて記述されている書誌は、確かに完璧であるといえる。しかしその一方で、その書誌がデータとして目で見たとときに、見やすいものであるか、書誌をひとつ作るのにどれぐらいの時間がかかるのか、ということを見ると、すべての面において完璧であるとは言いがたい。では、これらの点について、どのように折り合いをつけて行くか。以下の二つの提案をして、このレポートを締めくりたい。

第一に、横山幸雄<sup>15</sup>で述べられているような考え方を、典拠レコードとのリンク作成に適用できないだろうか。すなわち、「遡及リンク」という考え方である。統一書名典拠のもとに網羅的に著作を集めるという本来の目的を維持するのならば、統一書名典拠のリンク形成は不可欠である。だが、書誌を作った時点では、統一書名典拠にまで手が回らなかったり、典拠を作るだけの十分な情報が得られなかったりということも十分にありうる。そういった場合には、典拠フィールドに、記述文法にのっとった形での記述をとりあえず行っておく。このとき、標目形が必ずしもこなくてもかまわない。そして後日、その典拠フィールドに比定されるような統一書名典拠レコードができれば、自動的に書誌中に統一書名典拠レコードの ID を埋め込んで行くようなシステムがあればよい。目録を作ったときに、リンク形成まで行えなくても、後のメンテナンスで書誌がより詳しくなっていくという仕組みである。ただ、これは書誌の中の典拠フィールドに記述された形が、統一書名典拠ファイルの中の標目形や参照形に合致していなければならない。また、合致しない場合でも、こういった基準のもとに合致していると機械的に認識させるか、ということが問題となりそうである。

第二に、現在のところ、書誌ファイルと典拠ファイルは別ファイルとなっており、ファイルを越えた検索はできない。書誌検索画面の TITLE フィールド中の検索語は、書誌画面の TR,VT,CW フィールドおよび UTL フィールドに書かれた標目形を検索しにゆくが、統一書名典拠レコードの SF フィールドに記入された参照形は検索することができない。それは統一書名典拠レコードとリンクされていようとされていまいと、同じである。これは、第一の提案事項にもかかわることである。書誌検索画面から参照形まで検索できるようになれば、言語によるスペリングの揺れなどもカバーできるようになるはずである。つまり、より網羅的に検索できるようになるのではないだろうか。

## 6. おわりに

音楽資料と統一書名典拠という、NACSIS-CAT の中でも、どちらもメジャーとはいえないトピックを考えてみた。実際、大きな流れの中でいえば、あまり顧みられることの少ない部分であろうが、このレポートが、ここにもこんな問題があるという示唆になればよ



いと考える。

---

<sup>1</sup> 「音楽」ということは、本来あらゆるジャンルの音楽をさすべきものであるが、少なくともこのレポートにおいては（というよりも、現在の目録作成の現状を考えると）西洋音楽、いわゆるクラシック音楽を指す。もし民族音楽などをもその範疇に入れようとするならば、西洋音楽を中心に考えられた目録規則では対応しきれない部分が出てくることは間違いないだろう。

<sup>2</sup> 音楽資料に GMD コードが付与されるようになったのは、1990 年以降のことである。したがって、それ以前のはカウントできない。

<sup>3</sup> この点は GMD コードの設定基準に一貫性がなく曖昧なところである。

<sup>4</sup> この数字には、RECON ファイルの書誌数は含めていない。RECON ファイルにも音楽資料が登録されているが、資料種別コードは付されていない。

<sup>5</sup> データは学術情報センターに提供していただいた。

<sup>6</sup> 松浦淳子・松下鈞(1997)「音楽資料の目録作成上の留意点」『図書館雑誌』91(10) p. 10 および

松下鈞(1999)「音楽メディアのドキュメンテーションにおける問題点」『情報の科学と技術』49(3), pp. 101-103

<sup>7</sup> ここでいう楽曲とは、たとえばオペラであれば、そのオペラ全体を指すこともあるし、また、そのオペラのなかのアリア一曲だけを指すこともある。

<sup>8</sup> 学術情報センター(1997)『目録情報の基準(第3版)』, p. 16

<sup>9</sup> 横山幸雄「書誌コントロールの世界(16) 典拠レコード その10」(1995)『びぶろす』46(9), p.24

<sup>10</sup> 『英米目録規則』第2版 日本語版 p.485

<sup>11</sup> 『オンラインシステムニュースレター』No. 30(1991.07.30) p.4

<sup>12</sup> 同上 p.5

<sup>13</sup> ここの数値には映像資料も含まれている。

<sup>14</sup> 実際、Webcat では典拠を検索することはできない。

<sup>15</sup> 横山幸雄(1991)「共同・分担目録における典拠コントロール : NACSIS-CAT の著者名典拠システム」『情報の科学と技術』41(2), p. 120

例 1

<BA32201491>  
 GMD:s SMD:c YEAR1997 CNTRY:ja TTL:fre TXTL:fre ORGL:  
 VOL: ISBN: PRICE:  
 OTHN:LANO:KICC210  
 TR:Dominique Visse, "chansons francaises" / Chabrier, Ravel, Poulenc  
 PUB:Tokyo : Romanesca , p1997  
 PHYS:1 sound disc (58 min.) : digital, stereo. ; 4 3/4 in. + 1 pamphlet (30 p. ; 12 cm.)  
 VT:OH:幸福の島 / ドミカグイ、フランスをうたう | コウク ノ シマ / ドミカグイ、フランスをうたう  
 CW:Ah! petit demon / Emmanuel Chabrier ; [texte par] M. de Chatillon = ああ!悪戯っ子 / シャブリエ | アア! イタズラッコ  
 CW:Tes yeux bleus / Emmanuel Chabrier ; [texte par] Maurice Rollinat = お前の青い瞳 / シャブリエ | オノエ ノ アオイ ヒトミ  
 CW:L'enfant / Emmanuel Chabrier ; [texte par] Victor Richard de Laprade = 子供 / シャブリエ | コドモ  
 CW:Pastorale des cochons roses / Emmanuel Chabrier ; [texte par] Edmond Rostand = 薔薇色の豚たちのパストラル / シャブリエ | パラロ ノ ブタチ ノ パストラル  
 CW:L'ile heureuse / Emmanuel Chabrier ; [texte par] E. Mikhael = 幸福の島 / シャブリエ | コウク ノ シマ  
 CW:Le sentier sombre / Emmanuel Chabrier ; [texte par] M. de la Renaudiere = 暗い小径 / シャブリエ | クライ コミチ  
 CW:Ballade des gros dindons / Emmanuel Chabrier ; [texte par] Edmond Rostand = 太った七面鳥のハラート / シャブリエ | フトツタ シチメンチヨウ ノ ハラート  
 CW:Ronsard a son ame / Maurice Ravel ; [texte par] Pierre de Ronsard = ロンサールの己が魂に / ラウエル | ロンサル ノ オル ガ タマシニ  
 CW:Nicolette / Maurice Ravel ; [texte par] Maurice Ravel = ニコレット / ラウエル | ニコレット / ラウエル  
 CW:Ballade de la reine morte d'aimer / Maurice Ravel ; [texte par] Roland de Mares = 恋に死んだ女王のためのハラート / ラウエル | コイニシタシヨウノタメノハラート  
 CW:Cinq melodies populaires grecques / Maurice Ravel ; trans., M.D. Calvocoressi = 5つのギリシャ民謡 / ラウエル | 5ツノギリシャミンヨウ  
 CW:Nous voulons une petite soeur / Francis Poulenc ; [texte par] Jean Nohain = あたしたちは妹がほしい / フーランク | アタシタチワイモトガホシイ  
 CW:La tragique histoire du petit Rene / Francis Poulenc ; [texte par] P. de Jaboune = 小さな妹の悲劇的な物語 / フーランク | チイサナ妹ノヒゲキナモノガタリ  
 CW:Chansons gaillardes / Francis Poulenc ; [texte par] anonymes = シャンソンのガヤルド (陽気な歌) / フーランク | シャンソンのガヤルド (ヨウキナウタ)  
 \*\*\*NOTE 省略\*\*\*  
 AL:Chabrier, Emmanuel, 1841-1894 <DA06431650>  
 AL:Ravel, Maurice, 1875-1937 <DA04516650>  
 AL:Poulenc, Francis, 1899-1963 <DA05977965>  
 AL:Calvocoressi, M. D. (Michel D.), 1877-1944 <DA0318662X>  
 AL:Chatillon, M. de ; Rollinat, Maurice, 1846-1903 <DA10976950>  
 AL:Rollinat, Maurice, 1846-1903 <DA05898643>  
 AL:Laprade, Victor Richard de, 1812-1883 <DA10976983>  
 AL:Rostand, Edmond, 1868-1918 <DA00460372>  
 AL:Mikhael, Ephraim, 1866-1890 <DA08662767>  
 AL:La Renaudiere, Philippe Francois de, 1781-1845 <DA10367056>  
 AL:Ronsard, Pierre de, 1524-1585 <DA01059166>  
 AL:Mares, Roland de, 1874-1955 <DA08726509>  
 AL:Nohain, Jean <DA10977090>  
 AL:Jaboune, P. de <DA10977090>  
 AL:Visse, Dominique <DA09607221>  
 AL:藤井, 一興(1955-) <DA07668021>  
 CLS:LCC : M1495  
 SH:Songs (High voice) with piano//K  
 SH:Counter tenors//K